

ヴォルス——路上から宇宙へ



図版1.《無題》1942 / 43年
グアッシュ、インク、紙 14.0×20.0cm DIC川村記念美術館

ヴォルス（1913-1951）は音楽と詩に親しみ、独学で絵を描くようになった稀有な芸術家です。ドイツに生まれ、1930年代にパリで写真家として成功するも、ドイツとフランスの戦争が始まると敵国人として収容所などを転々とし、不遇な環境下で描画の才能を伸ばし、第二次大戦後はサルトルら文学者に認められ、死後は「アンフォルメル先駆者」と評されました。本展は写真・水彩・油彩・銅版画そして言葉と、メディアを横断したヴォルスの作品世界全体を約120作品でご紹介する日本で初めての機会です。

会 期	2017年4月1日（土）-7月2日（日）
開館時間	9:30-17:00（入館は16:30まで）
休 館 日	月曜
入 館 料	一般1,300円、学生・65歳以上1,100円、小中高600円
会 場	DIC川村記念美術館 千葉県佐倉市坂戸631
主 催	DIC株式会社
後 援	千葉県 千葉県教育委員会 佐倉市 佐倉市教育委員会

概要

ヴォルス（1913-1951）は、音楽と詩に親しみ、独学で絵を描くようになった稀有な芸術家です。第一次大戦後のドイツに育ち、フランスに移り住み、1930年代にまず写真家として認められました。まぶたを閉じた人物、調理前の生々しい食材などにカメラを向け、強い凝視力の写真作品を残しています。

10代から水彩画、ドローイングを制作していたヴォルスは、ドイツとフランスの戦争が始まると収容所を転々とせざるをえず、そこで描くことに没頭しました。目を閉じているうちにイメージをつかんだといわれる、蜘蛛の糸のような描線と澄んだ色彩は、ヴォルス独自の魅力を放っています。

さらに油彩画を始め、慣例にとらわれない描法を開いたのは戦後のことでした。ジャン＝ポール・サルトル、ジャン・ポーランら文学者や詩人たちに認められ、挿絵の依頼を受けて彼らの著書に銅版画を寄せたのもつかのま、ヴォルスはわずか38歳で早すぎる死を迎えています。

貧窮のうちに没したヴォルスは、死の直後から「アンフォルメル」動向の先駆として注目され、評価を受けます。日本でも1950年代にアンフォルメルの作家として紹介され、1964年に東京・南画廊で初めてのヴォルスの個展が開かれています。その際、瀧口修造らが文章を寄せたカタログと画集が出版され、ヴォルスの作品が多くの人の心をつかみました。

近年は展覧の機会が少ないヴォルスですが、DIC 川村記念美術館では彼の油彩、水彩、銅版画にわたる充実したコレクションを所蔵しています。本展はこれらを中心に日本における受容を反映しながら、路上の石や虫を見ながら遠く宇宙までも見通した深い作品世界を紹介し、ヴォルスの再評価の契機といたします。

監修：千葉成夫氏（美術評論家）

コレクション以外の作品借用先：

国立国際美術館、大原美術館、横浜美術館、
J・ポール・Getty美術館、個人所蔵家

映像上映：

会期中、展示室内で城之内元晴の映画

『WOLS』を上映する予定です。



図版 2. 《コンポジション》1950年
グアッシュ、インク、紙 21.9 × 16cm
DIC 川村記念美術館

ヴォルスってどんな人？



セルフ・ポートレイト 1938年
Kupferstich-Kabinett, Staatliche
Kunstsammlungen Dresden,
Photo: Herbert Boswank

“WOLS”はペンネームで、本名はアルフレート=オットー=ヴォルフガング・シュルツ Alfred Otto Wolfgang Schulze (1913-51) です。父は著名な法学博士、ベルリンの豊かで教育ある家庭に生まれました。ドレスデンに医師の祖父がいて、姉や弟と幼少期を過ごしています。

ヴォルスは、幼いころから音楽と美術に非凡な才を示した、一風変わった子供でした。7歳から始めたヴァイオリンの才能を見出され、独学で水彩画も描いていた頃、16歳で最愛の父を亡くしてしまいます。17歳で学校から離れ、大学に進まずに自分の道を探すことになります。

第一次大戦の戦敗国ドイツで育ったヴォルスが、写真家としての道をフランスで見つけた頃、母国ではナチスが政権を得ます。ヴォルスは若くして後ろ盾もなく、ナチス政権下の兵役忌避者として、不安定な身分のままフランスに住むことになりました。

フランスに渡って間もなく写真家として成功するものの、その後、敵国人のため就業も許可されず、収容所にたびたび収監されるなど、住居も転々とする生活を続けます。彼の心を支えていたヴァイオリンは生活のためにすでに手放しており、転居のどさくさでカメラも失ったとき、彼はより一層、絵を描くことにのめりこんでいきました。収容所でも描き、引っ越しを続けながら描き、健康を害してからはベッドの上でも描いていたといえます。

生活力のないヴォルスを支えていたのは、年上のルーマニア人女性、グレティ・ダビジャでした。1933年に二人は出会い、グレティはヴォルスに宿泊場所と食事を与えました。1940年に結婚すると、第二次大戦中の度重なる引っ越しのなかでもグレティは彼の絵を大切に保管しました。生前は勧められても作品発表を好まなかったヴォルスでしたが、死後、当時の美術動向のひとつ「アンフォルメル」（「不定形」の意）の代表的作家とみなされるようになります。また、ヴェネチア・ビエンナーレ（1958年）でヴォルスの特集展示が行われ、再評価が急速に進むことになりました。

1章：写真 路上と台所 [1937-41年]

大学への進学を断念した 1931 年、ヴォルスはドレスデンの女性写真家ゲンヤ・ヨナスのもとで修行します。翌 1932 年、ベルリンのバウハウスに向かったヴォルスは、ラースロー・モホイ＝ナジと面会しますが、同校が閉鎖になると告げられます。ナジからもらったフェルナン・レジェとアメデオ・オーザンファンへの紹介状を手に、ヴォルスはパリに向かいました。

写真家の道を進んだヴォルスは 1937 年にパリで写真の個展を開き、好評を博します。同年万国博覧会の「エレガンスと装飾」館を撮影する仕事も得て自信を得た彼は、パリで肖像写真を撮影し、成功をおさめました。この頃から自らを WOLS と名乗ります。本展でもマックス・エルンストやジャック・プレヴェールをはじめとする文化人たちの肖像を出品します。

ヴォルスは自宅で撮った静物写真においても特異な才能を開花させました。とくに野菜や肉など食品をオブジェのようなセッティングとコントラストのあるライティングで撮影した写真は、食べ物や日常とは全く違う見え方でとらえ、新即物主義とシュルレアリスムの視覚の影響を受けながらも、死したものを食べる人の摂理をあぶり出した独創的な作品として評価できます。

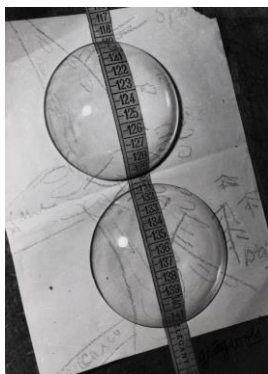
カメラの前でおどけて連続ポーズをとる自写像、路上生活者たちに寄せる視線も見どころです。ヴォルスのヴィンテージプリントはほとんど残っておらず、本展ではゲッティ美術館と東京都写真美術館が所蔵する貴重な 4 点を展示します。主には、作家の死後に夫人が整理したネガから、1970 年代に作成されたモダンプリントを展示します（ゲッティ美術館、横浜美術館、東京都写真美術館より借用）。



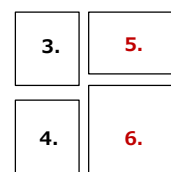
図版 3. 《無題》1939 / 79 年
ゼラチンシルバープリント
30.7 x 22.9 cm 横浜美術館

図版 4. 《無題》1939 / 79 年
ゼラチンシルバープリント
30.3 x 21.9 cm 横浜美術館

図版 5. 《ニコール・ポウバン》
c.1933 / 1976 年
ゼラチンシルバープリント
13.6 x 20.2 cm
The J. Paul Getty Museum, Los Angeles



図版 6. 《ごみのある一隅、浮浪者》
1940-41 / 1976 年
ゼラチンシルバープリント
16.3 x 17 cm
The J. Paul Getty Museum, Los Angeles



2章：水彩画と油彩画 幻視から宇宙へ

写真家としての自分の道を見出した矢先、ドイツとフランスは戦争になり、敵国人のヴォルスは収監されて写真の仕事は中断せざるをえませんでした。収容所内でヴォルスは幻想的な水彩画を描いていたようです。彼自身は作品に年記もタイトルもつけなかったため正確な制作年はわかりませんが、大まかには、さまざまなイメージの交錯する幻想的な絵は初期作品、抽象的な水彩・素描と油彩画は後年の作品に分類されます。

ヴォルスは少年時代にパウル・クレーの展覧会を見たと言われています。浮遊する形体や線描と色彩の層をなす関係のなかにその影響を指摘できるかもしれません。何かをスケッチするのではなく、目を閉じて待ち、現れてくるヴィジョンを描いたとも言われます。初期の特徴は澄んだ色彩とのびやかな幻視力です。中空に浮かぶ街や浮遊する船のイメージを線描で描きながら、写真制作を中断した1942年頃から彼の線は特定のかたちからほぐれるように抽象化に向かっていきます。



図版 7. 《人物と空想の動物たち》1936-40年
グアッシュ、インク、紙 22.5×31.0 cm
ギャラリーセラー



図版 8. 《作品、または絵画》1946年頃
グアッシュ、紙 20.5×31.5 cm
大原美術館

1940年に釈放されたヴォルスは、南フランスを転々としながら再び精力的に制作します。1942年にはニューヨークのベティーパーソンズギャラリーで水彩画の個展が開かれました。同年、ドイツ軍が南フランスを占領したため、夫妻はデュルフェイに逃れます。この地で夫妻は、マルセル・デュシャンとニューヨーク・ダダを推進したアンリ=ピエール・ロッシェと知り合います。ロッシェはヴォルスのよき理解者となって水彩画をコレクションし、ヴォルスについての文章も書いています。ロッシェらの協力で戦後は展覧会の機会も増えていきました。ヴォルスが本格的に油彩画に着手したのは戦後のことです。画商の勧めでカンヴァスを与えられ、独学で描いたその絵は、激しい筆致、絵の具の盛り上げ、ドリッピング、グラッタージュ（ひっかき）など、多彩な手法を使って動きのある画面となりました。



図版 9. 《構成 白い十字》1947年
油彩、カンヴァス 32.5 × 45 cm
国立国際美術館



図版 10. 《閉路》1948 / 49年
油彩、カンヴァス 32.0 × 46.0 cm
DIC 川村記念美術館

3章：挿絵銅版画 文学とともに

ヴォルスは文学を愛し、さまざまな書物から文章を抜き出してはノートにメモを集めていました。また、自分でもアフォリズム風の文章を書き遺しています。

戦後になって、パリでジャン＝ポール・サルトルと知り合ったのも大切な出会いでした。サルトルはヴォルスの作品を認め、彼に援助を与えます。ヴォルスはこの頃から手がけた銅版画で、不思議なイメージを描きだしました。銅版画は彼の生き生きした線描を活かすメディアで、ジャン・ポーラン、アントナン・アルトーら詩人、文学者の本の挿絵に使われています。サルトルもヴォルスに2冊の自著の挿絵を依頼しています。彼の書いたヴォルス論「指と指ならざるもの」は、サルトルの代表作を収めた『シチュアシオン』第4巻に収められています。



図版 11. 《三つの小さな漂う形》1949 / 62年
アルトー 『セラフィム劇場』(1949年刊)の挿絵
ドライポイント、紙 18.5 × 10.5 cm
DIC 川村記念美術館



図版 12. 《裸体の花》1949 / 62年
サルトル 『食糧』(1949年刊)の挿絵
ドライポイント、紙 12.3 × 10.0 cm
DIC 川村記念美術館

ヴォルスのことば

サーカス・ヴォルス

わたしの子供時代は不幸せで、親密さとはかけ離れ、傷つけられた気持ちで育った。子供時代が急に終わってみると、自分がかかえている問題にいきなり直面しなくてはならない。

それまでわたしは、自分がどんな状況に置かれているのか、自分の周りにどんな事態が進行しているかを、ちゃんと把握しようとさえしてこなかった。わたしがずっと何かを観察してばかりいたから、ほかのことを遮ってまでも自分のしたいことだけをしていたから、そうなったわけではない。むしろ因果はその逆だった。

高校生活は突然に中断されてしまい、わたしは自動車修理の見習いをすることにした。それから写真の修正技師の仕事もしたし、帆船操縦学校にも行った。

こうしていても、わたしにとってはヴァイオリンを弾くことがなにより大切だった。とくにJSバッハの曲をよく弾いたし、自分で作った曲も演奏して時を過ごした。しばらくそうしているうちに、レオ・フロベニウス^{*注}のもとで働くことになった。そこで学んだことは今考えてみると、そのとき自覚していた以上に大きかった。フロベニウスのところに行き来して以来、わたしは芸術の環境の只中に身を置くことができたのだから。

ドロ잉を始め、絵を描き始めて、それ以来ずっと続けてきた。わたしは自分の経験したことだけを頼りに、好き勝手なやり方で描いてきたのだ（それは何をするときもわたしのやり方になる）。

面白い偶然からわたしは職業写真を学ぶことになり、いつかその説明をしなくてはならないだろうが、写真の仕事のある点まで極めることになった。運にも恵まれ、すぐに売れっ子になって大忙しだった。

1年もこうして収容所に入っていると、自分が抱えているいろいろな問題系をそろそろまとめ、まだ判然としない私の人生のゴールにむけて、総括したほうがいいと考えるようになった。

そこで考案したのは、「サーカス・ヴォルス」と呼びたい一種のモデルだ。この名前は理にかなっているはずだ。というのも、サーカスというものは、どんな雑多なものでもすべて取り込み、それぞれの機能を役立てて、サーカスの一部にしてしまうからだ。これまでわたしがしてきた様々なこと——たとえそれが現実に何かの結果を出すことがなくても——が私自身を成り立たせているように。ヴォルスという名前に関しては、何年前から大切なプロジェクトを企てて以来、わたしはこの名を使い始め、この名前に馴染むように努めてきた。わたしの「サーカス・ヴォルス」モデルを提示して、多少は理解してもらえるように、定義してみよう。

WOLS (収監者 ミル収容所 1940年)

* 著名な文化人類学者

関連イベント (予約・問い合わせ=電話 043-498-2672 / Eメール ticket@kawamura-museum.com)



■講演会 1

千葉成夫 (美術評論家、本展監修者) 「さすらいのなかでーヴォルスの生涯と作品」

4月15日(土) 13:30-15:00 レクチャールーム 13:00 開場

予約不要 | 定員 50名 | 入館料のみ



■講演会 2

高階秀爾 (大原美術館館長) 「アンフォルメルとヴォルス」

5月13日(土) 13:30-15:00 レクチャールーム 13:00 開場

要予約 4/21(金) 受付開始 | 定員 50名 | 入館料のみ



■スペシャル・ギャラリートーク

平野啓一郎 (小説家)

5月27日(土) 14:00-15:00 エントランスホール 14:00 集合

予約不要 | マイク・スピーカー使用 | 入館料のみ

■担当学芸員によるギャラリートーク

4月1日(土)、6月17日(土) 14:00-15:00 エントランスホール 14:00 集合

予約不要 | 定員 60名 | イヤフォン使用 | 入館料のみ

■ガイドスタッフによる定時ツアー

上記講演会・ギャラリートークの開催日を除く毎日 14:00-15:00

予約不要 | 定員 60名 | 14:00 エントランスホール集合 | 入館料のみ

■コンサート「ヴォルスが愛したヴァイオリンーバッハを中心に」

木嶋真優 (ヴァイオリン)、坂野伊都子 (ピアノ伴奏)

6月3日(土) 17:45 開場 / 18:00 開演

要予約 3/22(水) 受付開始 | 4,500円



*いずれも詳細は随時ホームページに掲載いたします。

図版掲載をご希望の方へ

- * キャプションの頭に**赤い文字で「図版+番号」**が記載されているものをご用意します。
- * 作家名・タイトル・制作年・所蔵者の情報は必ずキャプション表記してください。
- * 掲載情報の事実確認をさせていただくため、発行前にレイアウトをお送りください。
- * 紙媒体は掲載物送付（掲載ページの PDF 可）、ウェブ媒体は公開用掲載ページの URL 通知をお願いします。
- * このページを出力しファックスしていただくか、Eメールで下記の情報をお知らせください。

お名前 _____ ご所属 _____

電話番号 _____ Eメール _____

媒体名 _____

掲載号 _____ 発行予定日 _____

コーナータイトル _____

執筆者名（記名原稿の場合） _____

図版 No. _____

図版送付×切日（対応できない場合があります） _____

お問い合わせ・追加資料リクエスト先

DIC 川村記念美術館

TEL 043-498-2672（取材用）／ハローダイヤル 050-5541-8600（掲載用）

FAX 043-498-2139

広報担当：海谷紀衣 press@kawamura-museum.com

学芸担当：光田由里